



猿風抄
自一至三十一

甲子五猿号

共九
共十三

ル 4
375
9



門 4
號 295
卷 9



筑前國續風土記卷之二十一

志摩郡

志登村

志登村

七寺川

油坂

長岳山

今津

誓願寺

勝福寺

小田村

唐泊

大歳大明神社

東林寺

宮浦

釋迦牟尼嶋

玄叟島

柱嶋

西浦

橋井

野北村

芥屋

芥屋大門

立石寄

穴背

燈臺嶺

烏帽子島

小金丸村

可也山

可也ノ海

岐志

南林寺

新町

姫嶋

水我船越

引津

御床村

色田村

小倉七兵衛
藏書

新由村 潤村 益水 白梓塚 平寄止 畑江 馬場 泊村
 大日寺 板持村 婦夫石 津和崎石屋
 大蛇島

言前 新由村 潤村 板持村 婦夫石 津和崎石屋
 小田村 氣山 大倉山 東山 東山
 今割 普賢寺 普賢寺
 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡
 我前國續風土記卷二十一

能前國續風土記卷二十一

志摩郡

淡口印記 元明天皇和國二年能前國嶋郡の大領と
 姓と稱ししゆ多是は郡のゆあり是國史と云へし始之
 又弟善宗の十五巻と云へし能前國志摩郡の韓泊と書
 たり三代善宗を二貞觀二年正月を宰府云能前國
 志摩郡多庫は政り島と云へし郡と志摩と名付し事
 ひりはははの能前山乃りしり入海西へ海り兼京元
 邑のちより前京と云へしはるは海と云へし和山の能村誌
 山と云へし海と云へし郡志摩と云へし名付たりし志摩と云へし嶋の字
 と云へしと云へしと云へしと云へし百年のち入海御田と云へし

海濱の村里多し一て事多かり地瘠て良田少し其麦豆
こころし川少し一て水災多し恒五郡の所難きのこころ
此國中の諸郡となつて少く最下郡とす

和名抄に載るる各郡の所の名セツル

韓良 久米 高尾の字をこし 登志 こはの字をこし

羽茂 鷄永 川色 志摩

今稱する所の村れ名

吉永村	谷村	女系村	田尻村
太郎丸村	高田村	板持村	池田村
波多江村	志堂村	関村	浦志村
前系村	若系村	大浦村	船越村

久家村	新町村	岐志村	波志浦
荻尾村	釜丸村	貝塚村	津床村
色田村	色田浦	津和崎村	福富村
師吉村	馬場村	松隈村	丹田系村
吉田村	野小村	野北浦	櫻井村
若湯村	若系村	元園村	油江村
泊村	新田村	小田村	西浦村
西浦	宮浦村	高浦	唐泊村
今津村	湊崎村	横湊	姫崎
久崎 <small>十郎</small>	大蛇島		

志堂社

志守村あり延長武神名帳に怡土郡志守神一産
とありと志守も志守郡に属しある所の志守太神に
豊玉姫とてお殿の神と云ふり神切宮后神二
高良太神神才三と祖大明神志守太神と合て
四産之神社を是よりお田の申と林の二村をくち申と云り
神殿を西と向り九月七日お祭を昔と云り 神輿
岡村まで出する宮司七人巫女八人神人廿二人八人
以外御宿多く供奉するお祭禮いと云ふ事ありしと云
そのり志守郡の惣社として郡庁のそばに神と産
神と云ふありしと云世より馬場二世権現と惣社の神と
してある尚社乃お祭禮儀式をひりてお祭りおまつる所

え龜天のひ九列兵乱の時までも千二十の神田に
おまつる者おまつりしと云後いつれ時より人のおまつるや
おまつるへてお田をくおまつる未社おもおまつる後り其
流をすお田をくおまつる圃と云らぬおまつるえ縁二年の
妻前國主光之公神殿と新くく建てる未社と改
めおまつるおまつる華表と立て深し神田とおまつ
しおまつる神威と忽ち新して衆人のおまつる
ひりしと云るおまつるおまつるおまつるおまつる
多し神八人のおまつるおまつるおまつるおまつる
おまつるおまつるや

青木村

多きり八幡の古記等ハ在朝上より唐船の来
り集りし所なり又小松重盛公病氣の付りし
ころこの医師あり居りしと齋治と云ふ人
と清盛より言はる事蓋し無死と云ふ
龜山院文祿八年九月蒙古の使者趙等弼お
りて牒状と呈候家武家より通事と申つて
相對し及して云々

記十七卷文永八年十月廿二日此記白雲右
船着候今津郡件亦自右掌符捧牒状と云云依り
東使入路向西國大納言と云々亞相之仙洞執奏仍
依りて日の方候定し由帥大納言と云々此書

今津郡とあるは此郡の名とハあり又右掌符ハ
右津の事とあるとありも誤りなり右掌符より右津
ハ里あり候と異國船後泊ありつとありあり是ハ
よむしりの宅地れあり市所の船多く入入口は
昔は河津も云々と云ふと云々村里とて民
家多く寺院も十を云ふと云々西の方海中
と云ふは河津と云ふは東也此二三下南山軍余下
る所の海津ハ弘安のころにハ兵械の籠り候と
云ふは是れ河津と云ふは是れ河津と云ふは是れ
長江の候の事と云ふは是れ河津と云ふは是れ
沙中と云ふは是れ河津と云ふは是れ河津の石壁の

始より立寄りし處に境内に大なる石窟あり

誓願寺 三言宗

志志山と号す今傳はるる縁証に曰く寺を仲系氏の
女而創りて之を寛智と云く人の建てるに亦其婦始
り二十字を以て佛堂と志と爲り大六の佛像
彫刻の誓と數一方丈建てるの形と企り依て誓願
寺と名づく始 高倉院に應二年九月よりて
願と數一之種の誓と云く一六丈六弥陀の像と作し
二六丈六般若經と寫す一三六丈六法華持者ふ人と
供養す一と誓願の二其誓願一かす承安元年
十月防別小娘拙人と呼ばて杖本と山とまきせり一子

之杖と云く杖本と運する事終りり一二年二月十日
佛像造られ斧始りて五月十日に比り終りぬ一二年
八月に佛堂の斧始りあり安元元年十月十日成就
して供養の事誓とけ終る又明菴僧正西仁安
三年八月に曰く杖本朝にるる高倉院の誓願と云
ひり切あり一よりて安元二年より治承二年と云くせ
らけ寺に復して一切の後悔するを待てるいははるる
集りてありしは高倉院あり
ある一は時宗西にりて禪と爲せり其言ふなり 物より志を
軍に七月十五日遷宗多苦供のころに法華一品經と
書寫する事と云くは彼用巻の檀那寛智と教と
らけ法人ともすなりと同一て是と書寫するは是か

とあり是十松院と云然るも打傳へしものも常西の
おかり獨結とあり

勝福寺 福宗

と注の中より龍記山奥聖徳福ると号けし其の
時創まきしや用基の時代詳し中奥の二岳と方外
禪師との夢惠團師にせしむるも昔ハ盤宗の
地と寺存す多しと也 後光嚴院延久五年に
寺と勅額下りし中祈禱後此と方外禪師の
りし編らるる紙と書し其外足利尊氏義隆乃
文書及國守領との寄進帳も多し傳りし事盤
々れいなり詳し記せん

柑子岳

草場村の東より南へは村と云はるる事
此の田畑を上げし事と云はるる事
と徳聖殿の社を有し修し檀院と云

小田村

草場村の西より南へは昔は村と云はるる事
つれせしむる退轉してある事
と移し並むる本像は寛言と大回元年と云はる事
安置するとしり又ら海山福壽と云はる事
双峯和尚建武二年と寂りし事
とある村のありし地と云はる事

二月廿六日 筑前國 正五位上 大歳神 之後 五位下 下 後 延喜
とありけし神の事としりる也 幸か初初浦延子村を
しり大歳神社を物まとも昔はけおとけしとて
清れ官人多くあり居て神の名もしりあるしこれの神
位と名ををあるはけし大歳神と云はしり鳥島の
所子なりと

东林寺 禅宗 济家

唐泊山と号し唐泊村と云 千光園師 為朝の付し浦
と云く岩せりし寺と云しり 別けりしと云しり
下と云しり寺なりしは寺と云しり 朗くしりて任家之地

宮浦

唐泊より一里許あり小川と流て村あり宮浦と云 宗
像二所の明神と勅請して宮と云しり 是の浦と云
程昔はけし神の祭礼の付し 神輿は海沖ありてゆ
しき神事なりしと云今かゝる義成を流て九月十九日
かゝるありは祭礼あり唐泊と云しり 津木の舟人
風とけし神と祈るけし村昔は唐泊と云しり 一村ありしり
近きけしとて二邑とあり又宮浦唐泊ありて
昔は一村ありし事と云しり 記あり

釋迦牟尼島

けしと云しり 大抵と云しり 唐泊より 乾乃方 二十丁
りしり 俗と云しり せしり せしり けしり 釋迦牟尼の
と云しり

此より下へ玄峯崎より北東申の方とありてその七十八丁
斗より崎の東北百五十斗横も赤百五十斗と云へてその方
と洞も洞の内もその南より六十斗横も四十斗底もその
ちあり斗もその南の北と八洞水の口より南の方
登の如くひらひらと立上る斗もして三十斗斗も
その斗とありて横より其向ひより南の登れ如く
かり交の上初めはさかして登も横よりして入難より
しと正保元年或教より西よりして上西縁と形ありて
六斗も是よりして西上西より南登も一斗斗裂あり
ゆへ今八洞中へて事之し初めは南登りて釋迦佛
の像と彫付てありてゆへ釋迦牟尼佛と云ふ南登りて

落しより佛像もせりて南登りて東へ持して小口あり
とてつら登りて小斗も是と云ふ事較りてして又西より
持し通り口も是洞の内の口へ凡水の口より西へて
ゆへしてその斗も五十斗もその内海ありて右の岩
の傍へ棠螺辛螺東海夫人及流の海藻多くと又是
より南四十斗斗と小斗も小斗と云ふ西ありて
南斗十斗ありて大斗崎と云ふ斗も西あり
ありて洞もありて西へ向り凡洞中長石あり
もその内登りて小斗と入へて俗に是と斗の耳と云ふ大斗
崎小斗崎もその海中にある洞の口よりつら登りて斗も
ありて一減と云ふ窟あり

くそ墓も別府見守り墓も遠く石垣村より
又上野國にもそ墓跡ありつる人もや古書にもこれ
そも母より一瓦せし傳り事虚説多けれ信
難し物もい人の言無証なりとあまはかりてありし
事にも難し此跡とて是城と戦ひ事ハ引巻く記
せり唐の事とて此の地前の必る唐の事あり是は城の
所あり

柱嶋

玄叟の乾の方五下許しそ名出の言さるる許り因三
斗もい此の石柱といひて 一尺一尺と柱名と号し
石柱の四方に六角ありも一又八角ありも六角あり
掃くも柱名大やう一尺三寸五分守許り名を大天の

柱名ハ堅くもさうい此の柱名ハ掃くもまもさう威大
もて同じくは多くハ端とせり又柱名の俗と出せり
而とあり東北の方とてん何れも是れ地といふ
寛文の帝とハ年業とくいふと年ハさうい

西浦

唐のころ山路一里ありそ海上一里あり尚昔ハ
まの民居ありこの村とて者々対馬の宗氏あり人
は子婿唐と争ひて戦と散りたる討傷し者亦
負つるこの城殺んともいへ舟まわし漁人た高き
とありこの船と装て是と宗せ飛前と年まきり唐
ゆくとて午ありとていふと宗の宗氏の山乃

布多るるりといふりともせし世沖の馬の背より子伝を
潮平のまじりあはるるい村のまじりともいふる 神印皇后
新羅の世より一の所けい山上の古と成てしと云はれし氏
俗を石知古山といふるに火のほくしといはれありといふ
さよふあはれに肥後ともいふと云ふ人 ワキ元嘉の村の内山乃
方と成後大友の家臣河部澄宗ともいふ地と成して
まじり信一屋敷成しといふり宅れまじりといふ地ありといふ
わづらひ先祖の墓と云ふ石塔と云ふ並一といふともいふり宅
の例に似せ澄宗の妻孫といふ住すい浦と大蛤あり圍俗
是と云ふ野山蛤といふ名を産す 長安の土産の蛤 寛文二年乃ころ
け村中の牛あつてまじり古田産病死すといふ熱病といふ症

病付めまじり必死す其形を防別山口の伊勢大神宮の
神祇の役ありし牛多く死すといふり成りて云々といふ山宮にて
牛は病に犯さるる事あり其を程に治するといふ
よ敷ありて牛と程にいふとい病付て死すとい敷治す
と云ふ人多く信し集めて古報苗ありし彼敷とい
ふ一古敷せは災やしと云里氏といふ村中の人と信し
集め山と將古報後苗と信して治すといふ七疋といふと
追つて古敷といふまじり牛死す事ありし敷の形に程
に似てわい雨に長くして馬の雨に似たり目とわいも尾も
程のわいわいをくあてしうらふと云ふありさなる人し
程に似たり 國君といふこと人を集むせなる楊井といふ

よりある事、進く又後々の事、進くとす、つらき事、進く、大に
進んで、いふ程、是とて、屋とあつて、池、水、久、魚、つ、祝、威
程、と、何、事、と、な、れ、つ、ま、し、ま、の、或、時、久、な、つ、つ、中、納、め、の、福、多、く
出、ん、と、す、り、耐、友、と、告、て、曰、つ、中、生、ふ、う、程、と、連、り、あ、ま、し、も、益
ひ、し、り、め、の、福、多、く、の、こ、き、あ、ま、し、浅、き、程、と、教、し、り、ま、し、
と、つ、別、を、教、程、と、さ、り、て、く、り、久、ま、り、久、人、是、と、福、多、く、の、
出、酒、と、買、酒、と、さ、り、て、く、り、奇、持、の、大、多、き、こ、り、て、 國、君
と、と、え、ま、し、ひ、つ、つ、い、大、定、室、の、未、成、志、村、と、て、病、死、を、り、又、同
一、の、事、あ、ま、し、の、村、の、奥、野、多、村、の、名、金、丸、村、の、名、金、丸、村、の、名、
久、程、と、な、り、こ、も、程、と、さ、り、て、く、り、久、ま、し、こ、り、必、を、あ、ま、し、
大、い、を、い、へ、き、し、て、も、主、と、い、ひ、し、り、て、あ、ま、し、久、り、久、り、久、り、久、り、

の、あ、ま、し、と、い、ひ、し、り、或、は、い、は、し、り、て、書、と、傳、り、あ、ま、し、の、昔
より、屋、と、な、り、久、ま、し、事、あ、ま、し、と、い、ひ、の、あ、ま、し、は、業
と、眼、の、あ、ま、し、と、い、ひ、し、り、事、減、り、く、り、ト、事、あ、れ、の、業、の
序、と、記、し、り、久、り、又、名、金、丸、村、と、小、金、丸、村、の、境、と、山、流、あり
よ、め、水、と、い、ひ、し、り、物、あ、ま、し、久、ま、し、の、め、く、移、来、れ、と、い、ひ、
と、地、と、い、ひ、し、り、出、つ、お、傳、へ、て、白、ひ、し、り、久、り、久、り、大、楠、木、は、
く、移、て、い、は、す、り、あ、ま、し、と、い、ひ、し、り、移、来、り、も、あ、ま、し、久、り、又、名、金、丸、
村、も、江、別、老、曾、村、と、あ、り、久、り、も、あ、ま、し、の、め、く、や、名、金、丸、と
名、水、の、名、れ、海、邊、も、亦、い、ひ、の、名、沙、中、の、地、も、ま、り、時
ま、り、移、来、り、久、り、久、り、所、も、ま、り、十、字、洋、も、

芥屋大門

海とありしころと鹿中條と鳥物と海波記
てふあそり人等恐るるも退きしころ舟と
あてぬるころ又いち門の東の方と大門の岩山とを
ありて事二宮を以て水中と岩をもちとさめり言
と水よりいなる余評は岩も亦宮守の角柱と橋と
かきひらるるありそとも洞窟も民俗海難とよふ又
冬月山嵐烈發して沖の彼大門の窟とくんと死ん其
ひきき救りしころて野一柵の岩壁の奇しき窟
中の異なる事せらるる山の水の勢ひとありて彼韓柳
李杜の文とありしころと形容しとくんと誠と奉
の奇観ありしころと奇匠とく人の國といはるるやとん

歌日本といふころとそとたつころとすは只恨しとくを
と筑紫の僻地とそと海と新羅の國といふと大海
系のやとありしころと海は風とす吹てありし波かき岩
山ありしは其れ口の極とて風波揺らるる時ありし舟の
いしころとありて考るる人等とくりきとくも口とありて
あり難なれいむりしころと海と舟と事もありしとく
もや古人の意と國の事と記しと文もありしとく
又歌枕も載候しつ事とありしとく

川津 はなまきとあり

川津を古名村とてて下西南とあり古名と岐志との
るころありし海と昔とけい入海と古名岐志とありし海

お通して大船を内海へ入るとき港より川の付より入
海へあせて空田とあり今も田地九丁もあつてもや内
谷の田地五丁とあり岐志の方からけい田地むい入
海よりしることも田の産と畑と貝のつとつとも谷の
方より海へ入れ山を名流の方よりとも田の田が
水流もこの海より田をとりて二丁計とあり昔舟の入
りたれは左者よりとあり谷の方へ海へ田のあるは
の付は岐志の方へ民家の西も城の種れしりし海へ
とありて谷の方より田の中より海へ水の流れもあると
ありとも谷へ岐志の方よりとも海へ水は海より六丁計
ありとも海へとありとも極口とありともとありとも海

とありとも雨水多し田へ流すは極口とありともとあり
ありとも岐志の方よりともとありとも海へ入るなりとありとも
ありとも海へとありとも左者よりともとありとも田の名は流
ありとも海へとありとも田の産と畑と貝のつとつとも谷の
方より海へ入れ山を名流の方よりとも田の田が
水流もこの海より田をとりて二丁計とあり昔舟の入
りたれは左者よりとあり谷の方へ海へ田のあるは
の付は岐志の方へ民家の西も城の種れしりし海へ
とありて谷の方より田の中より海へ水の流れもあると
ありとも谷へ岐志の方よりとも海へ水は海より六丁計
ありとも海へとありとも極口とありともとありとも海

万葉七絶
歌
持より川は海へ入るなりとありとも海へ入るなりとありとも
持より川は海へ入るなりとありとも海へ入るなりとありとも

樟川は海をさける所のつたてしむいぬと云ふをとりて
右の字よりある名のつたとし神馬堂といふ所のつた
らる浅瀬といふことし布子といふ所海堂といふ所の是
今も本誌の海堂といふ神馬堂といふも名
のつたといふ義とて移し和名なり

立石崎

本誌大門の山崎といふ名をいふ所を其名の山崎といふ
海と通し其山を海といふと云ふ所ありて総領といふ
石歌といふ其名のつた余りといふ字ありありといふ
所といふ名といふことし其山を海といふは是れ古
いふ所の名といふ一説といふ海といふ名村の枝村といふ所

の南の海の中といふ所の西のつた名多くいふ所の
西といふ所といふ名もいふ所ありて其山を海といふは是れ古
海といふ名といふ事ありて古のつたといふこと

立石

本誌村より四丁半東の海中といふ所ありて一町半ありて
海といふ名といふ所ありて石を海といふ名ありて其海をいふ
と横十町半東西の長さ二十町ありて其海をいふ所あり
る所といふ事と知るに沖のつた又浅くして海といふ
ありる所ありて其海といふ名ありて其海をいふ所あり
て其海をいふ所ありて其海をいふ所あり

はとくけ村の内小山の麓に於て山々を歩くと又熊野権現の所
舟の先を舟にて渡りて神とて神知と名つけしり小
叢初も依てあつて没行者の記と熊野権現の神武天
皇ありとあり神武帝熊野に入らむ事及劔と天
照大神と授けらむ神武帝は愛するん事口本記
とらんてつ佛者の熊野権現を天皇より來らむといふ
神武帝は日向國より上りて日向國も天皇より來らむといふ
いふ事とて合きて授けらむけ村氏の傳説も是と
いふ事あり又三國傳説に熊野権現天皇より來り
たんとて先劔と授けらむ事劔のこゝろを熊野神宮
といふ事ありといふ事此の事多々あり

熊野権現の使と鳥なりといふ神武帝熊野に入ん
といふ事一鳥の先と飛りし事日本記とらんて是
又ある事之傳説はけむら別神武帝日向より來りて
むらけの所を地なりやけ地日向より上方へ來り
むらけの所ありはといふも神武帝日向より來りて
河内海雲園の傳説ありといふ事一田のま
と一年とてむらけの事蓋事記と載るもハまも來
むらけの村中にも熊野権現の社とて村氏の傳
説ありとてむらけの所とて傳説とありけ村の枝村と
いふ事ありといふ事大なる名屋あり南と向り奥へ入
る事とてむらけの所とてむらけの所とて傳説とあり

歌つらん之方ハ石と云々云々石あり上古の家居る時
人あり住家打たれり

可也山

小金丸の枝村新山といふ村の人とあり故と新山と傳
ちてても云々可也の山と替りて峰とて十二所あり
る其峰ハ廣と南と下東西と下余許ありけ山の替
のまろり小金丸多田市麻活吉貝隊の女村あり山のめ
くら七葉といつてもいづ方と云々てもいづかからとを
くら其形ありけり富さといひてり石と傳へハ海業不こと
いふ山と云々けりといふも云々形と云々けりいへく傳説といへし山と
より四方と云々いふ系傳とていへるをいへるもと云々いふ山

祇法師花紫紅のり一若濟の海西より富さといひてり山
ゆり事と書しといふ山の事ハ細川通泰の死といふ事ハ
堀江の前より鮎屋といふと云々可也山のやうに死しむ
まといふも是ハ傳説ハ誤りといひしといふとむいふ村氏
も名やの山といふ傳説ハ誤りといふと云々可也山の海と云々傳説ハ
可也といふと別いふと云々事疑ふといふとあるに之家といふ
新所のありとあると云々可也系といふといふ山あり村と云々
塚といふと云々可也山の替りて云々可也山と云々傳説ハ
塚といふといひり小金丸冷泉の付いた國の換地帳といふ也塚と
書りいふといふ古塚の跡といふ小金丸氏部少輔良持守といふと
いふ事ハ葉集十五卷遺唐大判官川津亭船泊時傳説

くさうり少く向ひて又後くさうり系より一船載の西山龍王
の社なりと云ふなり系いより一舟後れと附の入海を命
海と云りゆゆ二里あり陸の直なりは半里あり此
所は住吉明神の社なり是と云城太の神といふ相傳に定
娘太の神香雅大明神も有りゆゆ社人の伝へて言傳ありハ
昔神印皇后影の跡くもさうりつけ社の例あり山と
是といけく住吉大明神といふありて云と云と云城
山といふ後住吉の神社と立てて是城太の神と号し
南林寺 曹洞宗
故志の内あり此所は昔全福寺といふ寺ありし處と
なり名れを移しと 忠之の村上府郡とも野村の八坂と

いふ所は南林寺といふ昔は云言ふあり寺に中はく
曹洞宗といふなりと云いけく村に橋一はは昔のてく志
言ふと再造くも此寺ハ丹波國永活なり東寺なり
之始なりと云い全福寺其基の事汝尋りて弘治のころ不
い信玄部高祖の城なりと云田城市も汝種後と削髪して
了榮といふ其嫡子五命住門二男二命繁種二男次命種
吉二人も一後の兄弟といふ男種種ハ後妻のつとて父乃
親也汝くい物なりといけ種種と世傳くといふい前妻
の子といふといふ後く兄三人父と不和なり二男種吉ハ
其母を承久り其母ありて汝家と切りハ其母一兄
二人といふい事なり一是くく種種く其母也

氏初入を哲といふ所の流言といふ人證種ノ嫡子推し
二男聖推二人の教善の具子物とありて弘治の流を
京田も防別山乃大内氏之屬したる。その大友宗麟近
國之威とありて流家多く、其後之流の可哀なれは證種
老妻とありて勝之教とうけて老一とて推門聖推弟
父證種大友家と稱し附屬して物々の内流あり彼亦本
を哲と天性凶悪の小人ありし。推門聖推是と也。其
哲は兄弟父、其の事と兼て知りて何時と幸と云ひ
證種へ終つたる。五高殿之高殿は内親とありて大友氏
流の豊後勢とい入也。抑父と可なり。其の合必定程逆
とありて兼て上りて偽りて告ぐる。證種老妻一後

其の事とありて二子成也。其の事とありて其の流言と
信し是非の流言も不友及哲とあるの子信流と云々
十付の及哲也。其の事とありて其の流言とありて其の
長為とありて其の事とありて其の流言とありて其の
おしり付んと云々長為を哲とありて其の流言とありて其の
し用このいめとありて其の流言とありて其の流言とありて其の
を付る事とありて其の流言とありて其の流言とありて其の
を哲流の事とありて其の流言とありて其の流言とありて其の
西村といふとありて其の流言とありて其の流言とありて其の
哲長を及推門聖推とありて其の流言とありて其の流言とありて其の
通すといふとありて其の流言とありて其の流言とありて其の

して高き一ありしとして世をとお果に五人の徳後とす
子母と宗物を祖父あるゆへ徳と頼んとて元氣の方へ
高ゆんときしき政平戸も一族あまは徳方へゆん
と志し丹原村の常根系より山へ高ゆき政志とすのり
まゝめて毎とあせま政平戸の方へゆんときしき政
父子二人大勢と後へあときを求りて政志と押寄りり徳
二子と母あまはせんときしき左家へゆりあまの徳子
と教くし討たる中にも高命を獲られ強られ精兵の
これあまは若た多くも負討殺りり物も高家と
衆と敵と雖く徳と頼とすしき事と信ししやあまは
出づるの前あつ七反田と云田地りて徳と頼のあまは

ちし終つて切腹す徳つハ女二歳無徳と十七歳とす
し大京長為子徳後も徳あまはとて徳とす今も
いふて是とすし人高きと徳と頼とあまはとす
今南林子のゆへ井も高きとす高きとす徳とす切
腹すゆへも是弘治二年八月七日の事とす徳とす
の飛無きとす徳とす徳とす徳とす徳とす徳とす
きり池田河原のゆへい徳とす徳とす徳とす徳とす
つけしりり徳とす徳とす徳の方へゆり直し高きとす徳とす
戸村と高家人もしき徳とす徳とす徳とす徳とす徳とす
いふるゆへい徳とす徳とす徳とす徳とす徳とす徳とす
及徳父子二人と徳と入徳と徳の徳と徳と徳と徳と

岐志より南にありて其初めはむらさき村にありて其世に
の別當はむらさきと云ふなり其村はむらさき村と云ふ所と
号はむらさきと云ふなり

姫嶋

古よりいひの嶋といふなり
是れ福島の南に十里あり

岐志より南の方とありて沖の海中とありて岐志の北にあり
より二里と云ふの地ありて其地はむらさき村と云ふ所と
南に十里と云ふの地ありて其地はむらさき村と云ふ所と
神の社ありて姫嶋といふ古語ありて其地はむらさき
彼姫大御神の社ありて宮山といふ地園もいふ所あり
はむらさき村といふ地ありて其地はむらさき村といふ所あり
十月五日にむらさき村にむらさき村の女人昔よりむらさき村に

神助ありてむらさき村にありて其地はむらさき村といふ所あり
といふ神にありて其地はむらさき村といふ所あり

△此下いふむらさき村といふ所はむらさき村といふ所あり

船越

船越といふ所は岐志より南にありて其地はむらさき村といふ所あり
はむらさき村といふ所ありて其地はむらさき村といふ所あり
長に二丁許ありて其地はむらさき村といふ所あり
の南に十里ありて其地はむらさき村といふ所あり
北にありて其地はむらさき村といふ所あり
山ありて其地はむらさき村といふ所あり
山ありて其地はむらさき村といふ所あり

あつたところへ舟渡り船から取越えと名づく船越の
氏家へあつた所可也の海のかつた山として龍王の社
ありは神靈治まるとして所氏も崇むと境地も絶えぬ
神靈もろもじつと前よりある地と云
てまこと海もつとまことありあつた神殿の内と石の玉
あり周九寸中と白き横理を龍王の社と名づく龍王の
島と云ふ島をいへば舟越の西より山なり廻り二百里海
中より島のやうな島越村と名づく島多くと出田が
と南に氏家ありと西の出崎と名づく島の首と云ふ政志
の西に出崎をいへば舟越の東へ返るとは里計なり

舟越の久我 里人ことと云ふ通すくことと云ふに官家の久我氏
城外の久家の里も此のこころなり

久家の布村は漢人のすむる久家浦よりかへ渡りて
少くも久我浦より事ハ舟越の西より洋に記しつとまこと
と名づく久我と浄徳とあり曹洞宗の道世庵とあり
り佛堂猶然とあり釈伽宗の佛像も在画
の佛像も又馬の角と細じ長さ二寸久家のつし
ね下りし山村も是久家れ枝村としてけまら地なり
と南に下り海へ出ると地なりと出田村といふ入海と福
つる事ね下り久家の布村より西へ向ひる山にあり向ひて
表裏よりし山に沖麻村とお對より昔は出田の首に
入海の方十下津かや隊もつとて通すつと名づく御く
新田とあり寺山沖麻の首もは出田とあり久家と山

の地今も三方ハ海として一方ハ陸にけりたり之我ハ東西
入海多して北の山より上りて入海ニツ東海ニ至り
て之ハ九野ハ本倉の海濱こゝに以て志久我形我山
色田沖床ハ入海ありしりるに境之又久我山の前ハ
少く上りハ竹の越山より上り山ニ顆る女岳男岳と云
ふありこれ共り可也塚村あり

沖床村

け村可也山の共りる久我村の枝村寺山といふ所あり
お對して海と隔る村あり村の名と沖床と号せりハ
昔沖床郡觀世寺建立の付ありしと云ふこと
中華より河津院の像と伝へる佛の下におく族あり

床といふ置りゆへに沖床と云其後金ハ長江人
子守横之人守屋三守とありて後て此より今も
志久我大明神の社ありしりるに堂と傳へて是と云ふ
も河津院の像とありしりるにけりて遠くし河津
ありし河津院と云ふなりしりるに觀世寺の像と云
ふなり天正十四年沖床郡岩倉陣の付藩士の兵
具河津院と云ふなりしりるに後て世傳に形留あり
是れ赤洞あり志久我大明神の社あり是れ彼河津
院佛と中華より舟とつたりしりるに河津と風波あり
甚危かりしりるに五嶋の志久我大明神と船中ハ勅傳
て風波の難と云ふ事と祈り難なくなりしりるに

此地とい社と云うこと志す故に神といふは皇武
尊神神子十城王の御事なりと云ふと肥前國志に故に
神と從五位上と稱す事三代天皇御宇と云ふ
は村及久我船載新所見塚の内に田村の内宿昔時歿
世言ちの故地とい村のをまじり歿せ言ちの別當の墓亦
あり村人の宗澤塚といふ久我舟載新所も昔は沖床
村の内なりと云ふ

色田村

可也山の西もれ麓あり北土部加布里とお向ひて
こつと入海と流つた入海より可也の海の南より
別より入海の長と舟載の西端の首といふ出待より

東南前京より二里可也の海とい入海の南より久我
船載乃海の中なる流より

新田村

前京村のより少村あり元和四年 長政公此地と用
て田となしと云ふあり新田とい号に家臣菅和泉正
利よりて其事と監おせしむ故にこゝをさしと云ふ
和泉川といふ

潤村

益水敷言 平等寺址 白柰塚

福島より北と四里より前京といふより二里北西より
は村の通路と土師といふあり初め潤村の中村と土師と
云ふとも昔は北と平等といふ禪寺ありと云ふにして宅地

一所をいそと大友氏尊崇れりありし今亡して其址を
へ定りし其も有り歎言と尚存して土師の
鐘とて西福寺あり彼寺ももも寺鐘も多ししと
言傳へし又蓋水の歎言の初は洞村の在村にも佛
と土師の鐘あり土民の分け歎言を口布りて此所の
歎言と云傳へし一は京都清水二つは薩前蓋水
三つは紀前赤水なり佛體も加添して造りし中
秘佛のく名あり佛あり邊鄙にも多ししを近
しり訪てしもの多し今歎言堂も別平等の
地内ありし尚昔の歎言堂の前は山麓と植りて塚
あり是は向拝進まは清徳氏の墓とて山麓も植りて墳

もあつて其地もあつし

細江村

舊記曰志平郡波多江村と波多江と号し天長二年八
月甲子改して波多江と号す上代は甲子を海をよめて
西山岩根とありし入海ありし後世も甲子とて田と成
まり又は丙元佐土郡の内之寛平八年志摩郡に属
す天保二年甲子多々藤原と別て佐土郡に入ら
る田種直り甲子之節種貞なりては丙元佐土は細
其氏と波多江と稱す種貞なり代は波多江は佐土と細
江村の内は丹波屋敷とありし是細江丹波の居りし
宅の址と大塚と稱へし築地ありし細江ありて楠松

おと程強きり程身より二十代の子孫波多江小次郎程則
京田了常とははらう京田信隆天正五年秀吉公より
領地没収を以て以後馬本より付程別も幕後より領地
とあり程より佐々隆興守成政より方とあり成政生害の
後紀後國ときて小川隆興とは小隆京の子秀秋の時
彼家と出佐五郎也程より程より程より程より程より

馬場

六所程現の社も六所といふ八幡大神 神切皇后
武内大臣経野二所其沖祠と村の上といふ二所中
より河柄よりよりと備前とといふ沖宮祀りも一
月廿分系程も流福馬も行りといふ一志登大明神

とと志三郡の惣社と崇奉ししときはよりいふ
程現と志三郡れ惣社と崇奉ししときはよりいふ
をよりいふ程も人よりいふ程も又いふ程も又いふ程も

泊村

此所と油江のるむり一の方より泊入り元和四年油江
村と新田も本より泊入りいふ一へいふも元和四年
一といふ泊へいふ泊といふも是より依ての名より一田の
字も娘浦長浦袖中浦帆柱をいふより泊海傍より
よりいふより

大日寺

大和山より泊色よりいふ一寺にて大日堂の残り

お傳へて云天長四年釋光御堂也云々云々云々
可なりと大日の像大なる佛神の信玉部志摩郡古佛のつ
ひり五佛のつひり大日れり云々云々神印教十人指せしは
堂也上人西化のま孫と云ふと云々云々大日と云
尚昔ハ考ふ九品乃念佛と修せり云々云々唯哥舞と云々
云々業とし四方と遊りて海康の言云と云々信と悦
ハめ人の御心又傀儡の舞とも云々云々是國中云々ハ
茅屋桓太の念佛聖福寺乃寺中云々云々云々
正月廿九日廿八日大日祭あり正月十日云々堂也祭
り成なり云

板持村

村中ノ老杉大明神の社也九月廿二日祭あり毎年
宰府の社家二百人乞取して祭事とつし神輿大郡
丸村等て押つらあり云々云々一ハ村を宰府 天満宮の神
伝ありしハは例も云々云々

婦人ま石

吉田村云と云々云々云々大日と云々色らさ事雲のとし
云々云々云々云々板一石けらある云々云々云々
まきくん耐ちり云々云々云々云々云々氏信云々云々
婦人ま石云

はれ崎石窟

はれ崎村とあり前に向入二宮あり云々云々板石人右入

口あり其れ同てさそ其余入一弓めん横九尺三方と
大石とていじ入りうる考すて四角とて人あすなり

大蛇嶋

いそ山西の浦より亥の方にあつり十三里海中とあり
急のめくりた六丁南は長と十二丁東は六丁十丁あり
河よりとく廣狹異ありおろはありて大蛇と云昔は
いそく大蛇方いゆそ名ありと云傳へりて大蛇の
嶋りしをそと多しといひいそく大像大蛇神の社あり
又異國より非常なる長船の来ると防んこといそ守り
道もいそ處所といひの民の教と百人いそくすす小村と
筑前國續風土記卷之二十一終

筑前國續風土記卷之二十二

古城古戰場目録

那珂郡

古城十所 古戰場二所

博多古壘

龍神山城址

一ノ岳古城

天浦城

古野古城

老林古城

鷲岳古城

猫岳古城

虎岳古城

諸圀原

城腰城

席田郡

稻居塚古城

御笠郡

古城十七所 古戰場二所

竈門山城

内山宰小貳城址

舛形城址

米山古城	大野城址	岩屋古城
高尾山	城山古城	蘆城村古城
唐山古城	不動城跡	天判山古城
飯盛山古城	柴田古城	米嗑之城
二市合戦場	博多見城	和久堂城
龍ヶ城		

筑前國續風土記卷之廿二
 古城古戰場
 那珂郡
 博多古壘
 古一より此地を氏家多く經營の跡を以て海軍城
 警備の防禦のこころ兵と多く置てしる所なりれ
 四方より要害と稱せしる一面は石壁を以て是れ上
 古よりありしや弘安の時修補せしめしやけしむ博多
 と名付てる城府と云妙樂寺と石城山と号せしも
 彼寺昔ハ海濱にありしを移して是れなり東ハ袖の
 湊の入海ありて西の方那珂川と通せり此れ又今

筑前國續風土記卷之廿二
 古城古戰場
 那珂郡
 博多古壘
 古一より此地を氏家多く經營の跡を以て海軍城
 警備の防禦のこころ兵と多く置てしる所なりれ
 四方より要害と稱せしる一面は石壁を以て是れ上
 古よりありしや弘安の時修補せしめしやけしむ博多
 と名付てる城府と云妙樂寺と石城山と号せしも
 彼寺昔ハ海濱にありしを移して是れなり東ハ袖の
 湊の入海ありて西の方那珂川と通せり此れ又今

年福園の城なる墨と築くありて取用して今も之
斯く昔も博多の海岸なる城を築くは海軍法に記す
博多と石城府と記すしけふ多しなりて弘安四年正
月元世祖皇帝日本と攻んとて阿刺罕范文虎浩茶
丘木子庭張後都等と大将として士卒凡十萬人と
つすすけりや

高麗國の兵と中華と加勢して日本と討んとて
兵と到てりやと後す中華高麗の軍兵約合十萬
余人數千艘の船と來り高麗王加勢の事元史及
通鑑後編と云ふなり
阿刺罕の攻めて病死す范文虎亦軍評復
逐くして一變に難と成ぬ七月に蒙古の兵船來

高麗の加勢は日本乃地と着志は強嶋と云ふ
の日本に軍勢とも得りて今我とすなり八月朔日大
風吹て蒙古の船悉く破壊し士卒多く溺死す
日月五日范文虎等これ法を將に死す一營あり舟七
八艘と云ふ事ありて近り其人未の軍勢も五龍山高麗の
玄叟の
嶋の事あり八幡島等死す高麗の事あり元史に云ふ龍山
と云ふり俗に云ふ八幡島と云ふは此嶋なりと云ふ事あり
と云ふ事あり後ハミヨウ丸と神といひて玄叟の舟を盡して
小舟大の神といふは此嶋なりと云ふ事あり八幡島等死す
号は云ふ又此前相浦郡の事あり高麗の事あり
高麗の事ありと云ふ事ありと云ふ事ありの事あり
波りおあけよきて居りし其内は破船と搦ひ蒙古
古高麗人も多く逃去りぬと云ふ事あり法人は張百戸
と云ふ者と強兵の將として彼らを知りて少相本と切船

と造りてゆんとする如く曰七の流葉の兵太宰小武之帝
乃馬ノ系資と大将として兵船数百艘一取平めて宿霧
へ押寄て攻められ蒙古の葉の人戦負て討つて去多し
亦幾くもしたる二千人と日本に兵をとり生捕て曰九日
博多の形河川の邊をてまて切敷す
右の軍れ事元史の日本傳并元乃
文獻通攷續編八幡愚童記に及るなり太平記亦く記せしむ
虚説多しハ幡愚童記乃安土城攻めし時七り海軍の
船風を以て望む月夜に城舟をく漂泊してはむ大ねを
逐るなり強形もはばおほき敵と上りて果すとすしこと
るに死人も多しなりて地とつておほきなり
上りて七の艘もをばりて疲れしは破れしとす
うて七の艘もをばりて押出の邊に小武なる舟
も押寄りて城もをばりて力合と行て防戦し城
余人海とを多しハ生捕博多
中川の舟もをばりてはと切敷
と之を二人とゆりては路と流さして在園

ゆりてはけ時高藤ハ兵を元朝の兵の加勢とあり
し六人今とあると蒙古の言句藤とておとすし事
と後うゆらけけ時の事とあり蒙古としりてし
らむいことうこと通ひつるものことと對せり言
句藤ハはらる藤の事とす言句藤とてこととしり
言お通より蒙古の言句藤としりてことと流事ハ
康富記と入へり是と考へずして蒙古國表と書
人も誤りて付敷き一も藤人の屍と信ぶるは祖
村の近きありてつめ其こと寺とす藤も是
ありとい寺のせりて是址のこゆあり藤も是
かりあり村の名とすとも藤も村も
又藤も乃
と村とす村

予蕭人の首と 蒙古は軍を負て十萬に兵を死し
てしる隊あり 五雜俎といふ明朝の書に曰 元之盛時外夷朝
貢者千餘國可謂窮天極地固不賓服而惟日
本崛起強不臣阿刺罕等率師十萬往征得返者
三人耳 是を以て元は元の時諸夷皆元朝に降
しと唯日本のみならずと云ふは後いふ博多
はのちを要害に爲化せしは時博多が海濱に
文書尚國中に云ふ一書に曰く

元和五年二月十二日 神定禪地取返
是 花園院冲時鎌倉將軍冲時書のちを以て
博多前浜石築地修補とす人さしりも知乃快多
其後天下亂國とあり九列を治る合戦やむ時あり
しる博多も回福とありや天文十七年とて
博多炎上りぬ永禄十二年の月十日はして大友
宗麟の勢と毛利元就の兵と合戦をす大友元就
博多を互陣に中國方は軍勝りて大友とす

向没而云破換云加他は終に印し仍る執連は伴
少武能後ち 妙あり

貞經在判

元和五年二月十二日 神定禪地取返
是 花園院冲時鎌倉將軍冲時書のちを以て
博多前浜石築地修補とす人さしりも知乃快多
其後天下亂國とあり九列を治る合戦やむ時あり
しる博多も回福とありや天文十七年とて
博多炎上りぬ永禄十二年の月十日はして大友
宗麟の勢と毛利元就の兵と合戦をす大友元就
博多を互陣に中國方は軍勝りて大友とす

清和系の備と三尾野とをけては内と放せしむらん
かゝ夜々々焦土と命の民各安住せし民の寔を
救へりて其後いささ其のこゝ成しとや

龍神山城址

安徳山田権系之村の境より安徳天皇岩門より
中津川の村を渡りて武士に居りし城と云

一岳古城

一ノ岳村より一岳と云古城を本丸の址方之段より十
町余山と云あり近せり龍紫上野外唐門の出城ありし
とや秀吉公いしと九列と伝代しむらりし前山當ふ
の内も今は方丈方丈にて二つと云ふと云ふと戦争止

時より中ノ山岩を柱月龍紫鼎の如くとびとち若出
城向城とくま夜と云て合戦と及ぶ物も龍
紫系の子孫を統増と龍紫の聲とすまとの約
詔運の子孫を統増と龍紫の聲とすまとの約
詔とて天正十四年卯月岩屋へ輿入婚禮を柱月け
しとす物と云後ハ狩真の身と於て龍紫出来しと
薩摩へ使と云龍紫の橋と云すしとすしとすしと
是よりして清津系書歌傳集院在唐のまゝを得しと
出陣し天正十四年七月八日唐門の館と取付政修の
又猪尾の南の取の城と云はるし唐門と猪尾乃
城と追わけ龍紫と及びしと唐門の伝言しより下

と免し親族密に固まると云ふに下しそは薩後三
猪の大首寺と押こり高沢付並しり相又日月十
薩摩の士と橋高の金村本治部重村月家入上野
伊豆守一子余人は勢と率して相河郡のつとを向す
是ハ薩摩の門の家入固を城の古もも宮藩の城ハ
籠す山田河内と大物として五百余人龜尾の城下
とろ石とてこよハ大木と横し入城戸と撞けてア岳
の城ハ橋籠ハ是ハ依て薩摩方ハ若宮藩の城ハ
さる内ハ是ハ城高ハ後と女くして之ハ元の城ハ取ハ
らんる為此も本村本ハ改めし上野伊豆守ハ本内
者ハとすハ押ゆくそ前ハ牛頭とていふ事

籠籠り端城もいへもあけ退きしは何の妨もな
不入を村猫嶽と云ふ早て押寄て日々細と密に放火
し次々く攻をつく城内の兵ハ勢ハたんと見せし
龜尾の尾乃本藩ハかくれ居てあつり銃砲と折城て
町城ハつは言本村本是とて歌をすハしりも小
勝と見ゆつをわさしあつり一あてあてんすこと
谷高し山澤と廻り歌乃らより横人ハ関ととつ
ゆりなまハ龜尾の山麓とてこつる籠籠り家入歌
のこつり四方城をて後と包まれてをけりやさひん
皆も城をて川よりつらつらつたれハ薩摩の軍勢龜
尾と向陣と云ふまハ一ノ岳ハ山高く石坂して

く攻上る事成難きといふ事んと山とん上りては斗て
口既くさるる其表すくありて流業は中しあすい
あひらん肥前成りて流のたりて岳の陣は村月氏
の家人たどるる守せたりかくて庭門を囚へたり
流後れ人苦るる居たりし生虜とあり流業のゆり
ん事念たりて一岳の陣は村月氏も流業を賣
りて事なき流業を流業のりて流業を流業と
人殺と集りたりて船兵も七つ百人も流業の流業
の者も宿直したりて流業の流業の流業の流業
一岳の陣は村月氏も流業の流業の流業の流業
とありて流業の流業の流業の流業の流業の流業

まより兵糧とせよせ再佛庵の陣とを流業の流業
吉公より上向孝高と流業の流業の流業の流業
取入りて由り流業の流業の流業の流業の流業
一岳の下五ヶ山に入谷会たりて平なる小山も流業
系とありて一岳の陣は村月氏も流業の流業の流業
と頭風山南好るる流業の流業の流業の流業の流業
其よりしらの高きと流業の流業の流業の流業の流業
ありて流業の流業の流業の流業の流業の流業の流業
麻生氏部少輔の居城たりて流業の流業の流業の流業

天浦城

下白水村ともむりて流業の流業の流業の流業の流業

や当郡一徳村の上二嶽の峰を臨み行くと云
城のありあり

古野古城

三宅村よりしらの山より東のこへ長くさへある尾崎
のちある田地よりいささ十町ありあり。南少く濠と谷
あり谷より山をまてハ丸なるさふりく屋敷と云ふる。
や一東の尾崎と亦くのこし西の尾つまきの山は
堀切ありさういハ二股余其畧の面れとし山より
海とさうく尾崎一当郡沖合郡極全郡をく村里
一らこの内とまて務系れ地と此世の村山才れ士あま
と用い一はさうとまふも城を尾と云百年前

とハ的野主税入道と心と云若存と云しと云はふ

老林の古城

引下村ありあまの尾れ出城なりと云

鶴島古城

南面里村よりさき昔大友氏の家臣大野上総守
在城のありあり上総守何ゆら大友宗麟の山
あり宗麟九列と武威と振りも一何家申と猛将
勇士とありと云ふも此世とて僻地なりまハ禮法と
知事と云ふれハ上方とせり一和礼とありせお中
らも教へり心とれぬも此世とれハ人多く上を
ありと云ふん山岳の中よりある者と二人をりて一

とて左衛門九郎と云者と撰出し都へのちせきま
け者も是れある事なきなりしに都に上り二年逗留し
伊勢氏と通て和礼と云ひしに非格樂の事刀剣の
目利まで習ひ得てゆかりの事藤石斜らりしに其志
賞として能前那珂郡の内にて岩戸河内二百丁に於
て九郎と改りて上総守と号し其後岩戸へ入部一城
と撰しとて其地形と採ひたりしに山に高き山とて要
害ありとて城と取らして鶴ヶ岳と号し上総
守と号し其後と判て之を雲と号し 上総守と号し
其後と判て之を雲と号し
けに大友方とハふるに那志平城と小田郡沼吃那珂
郡といはれ鶴ヶ岳の左衛門と天正七年十月廿四日

造寺隆信其身に於て前よりふるに能前と其とを
しに先那珂郡といはれ大田と号しと稱してこの余に能前
神前郡坂布より能前五ヶ山のおく大野の里へ去り
鶴ヶ岳の城と攻んとて南由里と陣と取らりたる
かして能前大馬助虎門も大田とてふるに鶴ヶ岳
の城と攻らりしに田中と名に岩倉の城主と名に沼運
守と名に大野と名に鶴ヶ岳と名に後法と名に山田
守と名に陣と取らして隆信勢と對陣し大田能前兼てハ
鶴ヶ岳の城と攻らりしに何人もて後法と名に山田
守と名に沼運と名に後法と名に大野と名に大野と名に
てはるに岩倉の長陣と名に大田と名に能前と名に

電門山城

此城其始少と云ふは、恒土郡之祖の糸田恭種之男
何系と云ふて、源後平之系郡之祖と云ふは、恒土と云ふと云
す依て、高橋氏と稱す。建武年中、足利高氏海軍
より軍と起し、都へ攻上りて、時菊地と押し、
よには、義長一色入道之孫光種と九列の三換り
号して、所一色と云ふ義長、上洛して、後一色之孫
恒土より光種、恒土領地之孫と稱し、城と稱して居り、
其子孫お續して、在城す。豊後の大友親世時、尚
て九列の佐士多くと云ふ大友の幕下、恒土依て、高橋
以、織威勢と云ふし、
其子孫お續して、在城す。豊後の大友親世時、尚
て九列の佐士多くと云ふ大友の幕下、恒土依て、高橋
以、織威勢と云ふし、

跡より、高橋も大友と通へり、天文のころ、高橋之河
も長種、源後國高良山の侍と殺害せり、其怨靈
を多く、亦て、眼と云ふ事あり、
後、
一説、西平右平元日、光種七代の孫武種、
淺へき子あり、
其家、
告く、
一族、
と稱し、
橋の城、
て初、
り、

そく之愛花城して兵糧も其餘死と云ふ可なり
然るに大友の臣族一萬田一都を皆艦控り伯父流牙
りりしに此人とと斬りて持て備へし一向隊と云ふ
とのうもんと云ふ事麟々一一族の志も對しと
命を助くへしとて宝満の城と云ふ也之橋の地處く
没収し其の國の規矩郡以内とて亦成と云ふて並れり
艦控は月持實の二男元隆と書し其の前も其の城とありし
艦控は發して宗也と号し是れ後之も其の城と云ふ
艦控は元隆の後之寶満岩屋を峽西の城郭あり大將
たりして其の事と云ふ後之評定ありし之橋本藩
代の士之橋本中より其屋山北京福田伊豆成安花尾亦
すて其後府内之河もして城之れ事と云ふ麟々と云ふ

是ハ吉弘左を其艦控り二男流七郎信隆と艦控り嗣
子と定り性多と改め之橋本信隆と号し 後利發
紹雲 宝満岩屋を其城と主として其のしりしをの意成
と云ふ下も其の事と云ふ此の城と云ふ次之雪と云ふ之
大友と云ふの戦年之戦城して終之薩摩方之降し其
首義と守りし之天正十四年七月薩摩林月之亦其
より大軍と集りて攻りし之紹雲も其の防戦せし其
この山勢も亦其の事と云ふ七月其の自害せし其の
其城す其戦の事ハ詳し其岩屋の所之死より其後其
其云其の事九列一之義士ことわらぬ其の事其の
其勝既し其岩屋の城と攻りし紹運自害せし其の

聖武天皇御宇に寶滿の城下に高木と兼ら寶滿乃
城の押し進みし有り智山を陣の辨と令せて二萬
人と二萬八千と兼て備守の南の尾行より競上
の城と飛ぶ所の紹運の子統増家入及飛雲の家人も
岩倉を城と眼乃あつて力と爲しつる岩倉を城
紹運切腹のときと寶滿は城を治しつと嶋は方より
言をいふ元來寶滿は飛雲とお持の事おれは互に
不和合い小勢して彼大軍に敵せん事成難しとおひ
統増と云事しと兼て人送しおれはくお城もてはたすくは
當城と枕として討たすくまうと兼てつる薩摩の兵も將
の女もつとお遠あししとてお誓紙と敵は統増と城せら

物と歌方より約束お遠して統増と生虜と一紀後
國吉松とま少をりし高と白雲紹運の妻と飛雲は乃
飛雲とてをりつるを後統増及兼てあつとつる薩摩人
は是の初め院の内妻嶋とて兼て押し進みつる秀
吉と薩摩へいんとしつるお時嶋は陣系せしつる
是た迫お監より薩摩へ使者と兼てつるは統増史
婦とつる御つる吉ねと電門山陣をいふと城は
お余燈佛堂坊舎と焼付つる是と防人とつる
山伏十人お殺しつるお病と兼てつるお多つるつる
岩倉寶滿の城既して没つるつるおは秋月程美
寶滿城と云なりつる

人皆背きし一六六の内義隆より秋月系田山麻より橋
宗像宗と命して七の余八小武の城に押寄一〇一戦敗
の雖もく小武と追ひしは小武に比し入りて追き合
力の勝と得たりと新造寺に前も故と信望備と捕
へるるがうし後小武の家をしく海前に前残り大
内より志こいませぬ

練形城址

大石村の境内ありと云ふはけとい山形峯と云ふと云ふ岳
と云ふはけい山形と云ふはけい此城は古橋控の跡地なり
後らこい古橋紹運の跡地と云ふれりやけ城の残り
大石村の上と紹運を捕りて置けあり

系山古城

由漢系村と横波郡山形村の間にありけ城と云ふ橋紹
運の取立城なりと

大野城址

日本記と考ありし 天智天皇四年達率十祀新福
富達率昆福史と流布國とをきて大野及塚の二城
と云ふ也とありけ城を村の山より四王寺山別大野城
より日本後記と考ありし大同二年十二月甲寅新太
宰府云大野城鼓ヶ岳と云ふと堂宇とを建てるて
四天王の像と安置せしと云ふはけい山を
別大野城なりと事明しと四天王の像と建てるを云れ

こゝ細とありて其前前とて大内の藤下之陶尾
張と毛利家より謀伐の後と毛利家此進止ありて
あつた友九別の探頭職と納りてと稱して右の
の士毛利家と語りて大友と絶ひてはまはまに
すへー其と先年其國門司を我と毛利の兵を負
て敗れし九別のきりて其事其意とて且言
そと憤りいふ事して恥と雪んと謀と想てりかく
りゆへ毛利家より相討りて士二三百人其の死
は五九別とせし強と求り便りてりかくりて味方と内
通す人との國士とありてせり然るに其後艦艇を
あつりて其艦艇と合て居りてりかくりて其意とや

あひかん別毛利家とてりて西一四年六月の始より
高瀬と根城とし岩倉を壱岳と瑞城として其根城
運い入又藤原惟門の子右馬助彦門もけりて中あつた
しりて其艦艇と招き集りて片羽の城とて其のいじ
其後とすへてりて大友宗麟とて其意と評説し
りて評して後其意と評説しりて大友宗麟とて其意と評説し
ち艦艇吉江とて其艦艇の方の兵と率して七月
大宰府と押寄敵とて其意と評説しりて大友宗麟と
有て其意と評説しりて其意と評説しりて大友宗麟と
とありて其意と評説しりて其意と評説しりて大友宗麟と

満室

城の事
とありし 宗麟より列して橋の家をたるとして人
と授きし一と吉弘たよま支配理の二男活士命活理
衆と異なる意をいひ物と一して元禄元年高橋
の家とほき沖並郡と編りて岩倉家傳の由成氏
守とせしむ時ホ三歳とすべし後之法師して
紹運と号ひて後宗麟の向の軍に役せしめられし
より大なる部下の士少くして大乳をりし一紹運岩倉
家傳と宗麟一較年大なる二これたをたとへし
紹運の九列して勢の少くしてたれし一紹運岩倉
秋月道業宗鼎の如くともして五丁の向城とて人
交しはして合戦と及ぶ是より後てある一和議成

詞の事と後ハ道業家よりハ和議と於てハ紹運と
一味一宗麟と属すしきより一秋月よりハ宗麟一味と
叶難しけ方と回るハ和議と詞人より又倉山中
勢岩倉ハ城の事と指しけ者親類ハ道業家より
多しし一和議と道業と詞人より是より同て紹運の子
活七命活理と道業と聲とすしきよの約法とて
天正十四年秋月岩倉と興入るて惣社と詞人より
其の家老中の子とて双方より詞人とてをりし
と依て宗麟もつらき家并れし御く里とありし
秋月よハ中と少物ハは後ハ権真より方と於て難儀
出馬ハ一とて薩摩へ使者とて之ハ道業より橋と二ハ

城を築く所の兵を少勢をれば此大軍を以て攻めんと事
業の内をれと城中に防ぎ強く方方の討つ事多かれ
人殺と多く討せんも石の勢をやつてせん此は方より
莊者もと云はれと城中に彼として入らるればも皆紹
運少勢として大軍と門を攻めんとおぼへても尚も尚
城として義兵と遂にせんとの事皆懐誠之感入ていそ
ふも義者も石仁者の為と死せんとせんといふと
いふも何とて無逆をその大友とよりのや大友家の
邪獲ふとあり神社佛國と故布一衣も未だおの
無逆あるなり旗下國との徳士遂年よりと彼政府
とうとと逆心とあつすといふも義統武運おとつて

て飛と行中事能くすかして人れとつて累代の家
失ひをいんり歎き入ていふは是非尚あへし降参る人既
そ老僅の人殺と以て其の事ゆのた敵と十何あるあつて
る事比鄰なきも柄なき人いそとていふ事いそ
統虎宝徳の統増くも其の事ゆのた敵と十何あるあつて
新うて中たありと能てい各中飲を以てお遠るなりとい
ふ事ゆのた敵と十何あるあつていそとていふ事いそ
人殺と云ふといふと云ふといふとて豊後薩摩の
和議と紹運の關係をいそ和議成就の村人變とてい
ふ事ゆのた敵と十何あるあつていそとていふ事いそ
恨の入ていそとて紹運とていふ事ゆのた敵と十何あるあつて

并子息統増と其家と和睦の事に入らざるは彼友人
の心の儀より難くいふ事なり是の時と紹運面自致
先かれとてはた大敵と對し數年の忠義を盡し
成り事とすも口惜くも凡運命に極る事なり
時をた知りてあることとていふ事なり是の時と
士の初る事とて秀吉公の助勢より其陣よりとも知
らず其作人友家と威と失いへばともいふ事なり
高城は後
とていふ事なり是の時とていふ事なり是の時と
しとていふ事なり是の時とていふ事なり是の時と
謀ちやともいふ事なり是の時とていふ事なり是の時と
の謀りたる事なり是の時とていふ事なり是の時と

知る人も無りしは其の事なり是の時とていふ事なり是の時と
奪んて薩摩勢切取の事なり是の時とていふ事なり是の時と
より是と知りては其の事なり是の時とていふ事なり是の時と
有せし時を金つ児と稱せし事なり是の時とていふ事なり是の時と
其時より宇美河内より京山嶽と岩屋とよりて押取
るはめりける薩摩勢前後た者なり是の時とていふ事なり是の時と
岡と出とあけて敵とていふ事なり是の時とていふ事なり是の時と
て命と取ると敵とれども敵とていふ事なり是の時とていふ事なり是の時と
一毛介の山勢ありては其の事なり是の時とていふ事なり是の時と
其の事なり是の時とていふ事なり是の時とていふ事なり是の時と
陣へとゆるりたる程も述べし事なり是の時とていふ事なり是の時と

き入佛具教經と取らりし狼狽し乃あけり天智
天武持統文武元正五代の帝ハ神護寺にて大六乃
觀世音五体菩薩と並立一堂なれハじりり凡人
佛殿に入事と制す是に依て寺勢より治は兵庫
乃に彼僧とまじく軍務寺院に亂入の事と祈へなれハ
義弘彼僧の封由一丁寧し必書しやくて寺中に入也
亦の軍兵と並せしむ世に首と切寺門よりけ制法
高れと彼所との前とまじくせ歎言ちの四門ハ折月ハ
士とあすすハ意はしめしハ亦七の宮の刻より折方乃
奇子休抱と切居の治つこよせと表れ明々とすり
既く東雲門て地のりりあそへなれハあつこ切居と

すり屏とあそんとすり城守より後地とてす掃
堂よりあつこハ石と治りて投りけ幾も力とて突
たしと並しと明とて又攻り死人を切居と
むりりあつたれハとと治りて死すしとすり攻
入んとは知ノ刻より午の終りてあつこ城守ハ
勢りてと勢りてとあつこと入勢と攻り程
と福田氏初ら折居と治り亦の者しと折居と
り成富屋事つ折居と進り折居と歎治り押入ん
とす成富屋事と治り勇士と命あつこと治
り歎と入も治りすりて三人張のらと以て教
と射拂いしとあつこ成富屋事と治り折居と

辻治左衛門の市と申中治年人など先年と戦ひたり
村と形勢より防ぎたる水戸の事候も其後して形勢が討
死する處山中勢一よの者も池を防ぎても極勝
と取獲りて大勝討てて討つ者も二幸の丸と川入
三系紹心 後元國士三系山成也 新尾藤可日大守伊
差八市高橋御中も土岐大湯も討つ意今村
中治以下宗治の者大は飯して討死するもあつた
有て腹切あり或はく一交まらんとん年して最期
の暇をせんとして在丸と上るもたり或はむくの歌と
川廻り遠へ或は口は親一なり侍軍と云ふ力と
ぬきさう遠へ一ツ枕と依もたりさひくの歌なり侍

意をたつて事もなかり大將紹運の徳に既く破つて
しつらわつた兵とた者と互甲れたりや出候様
と切て出てもさうなる面とむくもさう甲の丸と二の丸
との丸と歌れ死人山のやくとかさありやすこれと
歌を事しとせん死人と事細へ攻入たり野村兵部
よの者并村月居士本は氏部不四五もくはくさ
さうさ家とさうさう在丸と直下には本と切集め
ば事とし堀切と埋め岡と化して裏をつく斯て口を
こし申刻のやとしまわい何れ残りたる城中の兵と
又さハ僅とる千人餘とハさうりたる志もさハ負
けり紹運はとらて今ハ是とを歌のよとがし

とて擣りこみり自害せしむ行年二十八歳と云ふ一
元龜元年冬後よりけ國に擣り十七年五城より
天正六年大友宗麟日向の高城にて戦ひ負てより
大友元盛勢おとろへとてを後へ逃ひけりし徳島
旅下の徳島守大友と背く紹運ハ其二の大友の身方
成りて依てこもりけり徳方と歌と云ふも一日も安
さやちをりけり紹運忠義ふきこすして戦年 戦
誠しや、ますもい歌と戦ひ武勇徳もておこりて
とすす終て忠と守りて身と終りわきますすも
忠信あり五十餘人の者も城と火とくけて一夜も自
害すり者も十言三死の誠より加勢二十餘人の士

強しに討死とを遂てなかり熱して岩屋の城中より
戦々をのほり百余人をなかり一人も歌と消しけり
戦死と遂人臣の義と遂へるなり紹運平生の情
深るなり且其忠義と感化して一人も忠義と失
らりけり一其は其勢も士卒す入て三人も余人討
りたりもあもあも百人とてけり一血ハ草芥とて
とし屍ハ山谷とてらて屋下の内れとし誠と悲
哀すりけり徳とてこの陣戦死する軍は未練今と
徳信守柳川と死氏乃家人とて七月の魂あり
こハ岩屋の城にありと徳とて一と徳と吊
りありすゆ此時紹運の屍と云ふもとて岩

屋の城ありて城を紹運の内室ハ之移致前より
女借入人きりし令せしむるとして亦紹運少くして降之
く防致し内室もや款こゝ入て之同と云切これハ
通るべきなるをくして紹運少くして討死す是より依て内
室もさう進みぬて紹運の妻子ハ紹運と進まぬハ
分りて宝満の城と紹運致死の後薩摩勢
大勢押寄て攻めし紹運ハ虜とすさり薩摩
の兵も宝満岩屋と秋月程まで後し足子直
こゝまで押しせたる物も要害よりさ城にれん
キやとて要路すへしとて入てさりたるかす亦之義
久しと陣より上方より赤舌云の先勢やとて上る

すし分りぬとて陣と川をへしとて知て進みぬハ
八月中旬迄勢は幕府の陣と川をへしとて岩屋の城と
秋月より素野新屋とすしと人殺多く移居
飛居たりとて先統虎の勢ありとせたるなり内室
小野理右衛門と云者白首とて忍び入火とてかくる城平
とてさして一交せしぬ小野とて小野城と云ありとて
花氏のより入る其後 園白殿やとて九列あり向の
より世と風やとてより船造ちより薩摩とて切
り働して軍勢と借し 花後三池の郡と押寄放火
すまといきとて先統虎より船造ちとて移し山の関
とてさる母字雲とて集りたりとて久しとてすれらる

是よりつと龍造りより堀江覚仙と云者とをり
石塙と以て薩摩勢の處なるをより石塙
勢を以て武士大進散し一宗雲とを集めり之は
了らぬ

高尾山古城

秋月種直は勢と紹運の勢といひて戦ひ又薩摩
傳津義久の多庫以る將岩屋と改し討の時也

城山古城

城ありと云はるは山に沖門南の沖門と云名を
城山の事なり記し城之東詳

葛城村古城

あまう城といふ城を詳しる難す

唐山乃古城

乙重村といふ山に古城の址二あり東城は安河内
傳直といふ者の居城し西城を神武修程亮石城
なりといふと云ふと大友と属たり神武氏を宇麻の
神藏ありといふは石重村と云たり之は石の城なり
をいふ城ありといふ

石動城址

生野村といふ秋月氏の麓下に奈良系形城あり
いふ者此城といふは石動なり其後高尾山系兵
隊ありといふ者奈良系九列征伐の時秋月は

して討死せり

天判山城

天判山の上と有り落葉彦門の家臣惟定は後弓居
任せしと也

飯盛古城

天判山の内と有り其と平のあり如長五十石橋十六
石と有り其城を拜武説落葉彦門の家臣惟定は
西城をとりしとあり凡國中の飯盛と名付しは
不々々あり

栗田古城

天山村と有り落葉彦氏の瑞城として村山近江守其子

澤正を討ちて是落葉彦門の旗となりて天正六年
秋秋落葉彦氏自將して瑞澤とてなりては是を
是ハ先岩倉と攻まらりて是は表へ傷んとて紀元
人後於渡河も家臣ハ内田吾平横田濂岐等上野
四郎右衛門木形形部と重と先子として河内人栗田川系
と陣としたり種も籠りて長谷山氏に捕縛され修理長
田惣三と名おぼへり其は同江沼氏に捕はるりて是
後の在位とて退き村に在りては同くお連とて是
人栗田乃城と名陣と居たりて岩倉の城とて高橋銀
運と名はの城とて戸次丹後入を道雪とて少軍勢と計
略し押出し川と流れて兵軍とはなりて是は歌味方

冬後より後夏に獲とるへハ紹運智謀ある大将
とて敵と近きと陣取せしむの計略とてを能く
立置まじしむるを能く

承襲城

二日市北町より東にこの城址あり其地の田を
承襲といふ人々承襲の城といふ城といふ名を詳

二日市合戦場

天正七年の四月初旬前田利長は北前必勝軍
唐門に攻め入り及逆しけり兼て内通の國士石目
守一も前田國一に城井長を討ち承襲上系前田
國一も前田利長を討ち前田國一も前田國一も

前田の内澄勅に依りて前田利長は北前必勝軍
とて國中と進歩し北前必勝軍の城を戸次道雪に國
一を討ち取ると高橋紹運ハ其の友方として二人
智謀武勇の名を得しむ是は後て大友父子も一向
とてりしむる也 秋月種高ハ九引と称して其名と稱て名譽
を得しむる者も其先世と承へしとて卯月上旬豊後の大
友家老志賀河内入彦道魁岩倉の城より出陣し高橋の
大友方小田部氏部補佐通大はる或は補佐通山以下
余人と承して秋月の出張しむるも其名と承へしと
向ふなり 松連並麻生元重も其名と承へしと承へしと
承へしと承へしと承へしと承へしと承へしと承へしと

しふふと高橋紹運元次を言ふは、近江郡と
退けを魁下と教ふは、希方にして岩倉の城に入り
小田部大伴も移りて居城の地となり、今も小田部正
が跡入るる栗口國高祖の城より出づるは、小田部と
いふは、高祖して小田部氏に痛く安樂平に城とせり
為國統る岳ありて日と暈る相又、秋月後高祖は
志賀道魁、松宗像こりて進こりてきて岩倉の城と
多と付んとて、中津に於て出張し、陣とす。高橋
紹運の事とす。二口市に出居して、日と暈る相あり、此軍
いつ果てしとす。八月にありて、大友方の藤原藤経、
秋小田部と備へり。すへんは、秋月後と教へて

什磨山といふ、長瀬郡の城なり。吾説ありは、此の
城なる陣す。かゝるは、高橋も岩倉に入りたり。

博多城

山形村といふところ、京の城なり。是より山形といふ
あり、城主名詳

和久堂城

松塚村の内田郷、小山あり。是も城址なり。しるは、陣の
尾といふは、此の城なり。藤原氏の家臣上野伊弉等といふ
この守りしと云

龍ヶ城

吉本村といふ城なり。高橋紹運の瑞城にして、其家臣

